

## 「十字架のもとで」

詩篇  
ヨハネによる福音書

第22篇 17節～19節  
第19章 17節～27節

説教 本庄侑子伝道師

主イエスの十字架のできごとが胸に迫る時、取り戻せないと思っていた過去が新しい姿で立ち上がり、将来を新しい姿に変えて行きます。

主イエスの十字架のもとでたたずんでいた人が聖書に記されています。その最後に出てくる「愛弟子」とは、ヨハネによる福音書の著者、ヨハネ本人です。正確には“主イエスが愛しておられた弟子”と記されます。ヨハネは主イエスの十字架の死、復活、昇天、ペンテコステの後、聖霊に導かれながら、それらのひとつひとつを思い出して福音書を記すのです。しかし、他の弟子は名前で記されているにも関わらず、ヨハネは自分の名前ではなく「愛弟子」、「主が愛しておられた弟子」として記します。

愛弟子ヨハネは、十字架に至る迄の様子を独特の仕方です。他の福音書と違い“主イエスが自ら十字架を背負って”という部分だけを浮き出すのです。全ては主イエスのご自身の意志で、おひとりでなさったのだと、振り返って伝えます。誰も助ける者はいなかったのです。

ヨハネは、兵卒たちが主イエスの下着を裂いてくじまてしようとする姿を記します。これは、その下着を売ればお金になるからです。十字架の真下で、人々は自分の“得”にのみ目を向けていました。人々に向けられている主イエスの愛に見向きもしないのです。しかし、このような姿は兵卒たちだけではありません。弟子たちも皆、蜘蛛の子を散らすように去って行ったのです。イエスを見捨ててしまった。これが、人間の現実であり、私自身のことなのです。自分がどのくらい得をするのか、ということしか考えられない、どうしようもない醜さをさらけ出して生きているのです。

ヨハネによる福音書には、ヨハネが隠してさえいけば伝わらなかったことが数多く記されます。しかし、自分の罪をさらけ出して記すこと。これこそが、主イエスの愛の恵みです。ヨハネは、罪多き私にしか語れないことがあると、自分自身の罪の姿と共に、主イエスの生涯を記したのです。ですから、これはヨハネの罪の告白集なのかもしれません。けれども、自分のことを“罪を犯したどうしようもない弟子”とは記さずに、“愛弟子”と記します。自分で自分を許せない時にも、私を愛し抜いて下さった方がいる。それが、主イエスであると十字架のできごとから受け取ったのです。そして、後の時代に

生きる人々に伝えたかったのです。ヨハネには胸が掻きむしられるような罪の過去があります。

ヨハネによる福音書には“愛弟子”という言葉が5回出てきます。そこに記されていることは、ヨハネ自身、最も思い出したくないできごとであったかもしれません。しかし、主はヨハネに記させ、私たちも、自分自身が赦し難い過去を、主イエスに受け入れられている者として歩み直せるようにして下さいたのでしょ。

初めに、最後の晩餐の時“愛弟子”という言葉が出てきます。ヨハネは、主イエスの最も近くにいなながらも、十字架を前に震える主イエスの胸の内にも気づかずに、裏切り者は誰かと仲間疑いの目を向けます。そして、今日の場面。兵卒たちの前にいなながらも、主イエスを助けもせずたたずみます。その次は、復活の場面。墓から石を取り除かれた様子を誰よりも早く見たのに、主イエスの復活には思いが及びませんでした。その後、復活したイエスと再会した場面。最後には復活したイエスと語り合う場面です。

ヨハネは、愛される資格のない自分がいつも愛されており、主イエスの愛はどの時も燃えていたことを、さかのぼって確認させられるのです。そのヨハネが十字架のもとでたたずんでいた時、主イエスの眼差しと言葉が向けられました。母マリヤをヨハネと引き合わせ、互いを家族として紹介する言葉でした。私たちに新しい将来が与えられたのです。神と人との関係を切り裂くような私たちに、新しい関係を築かせ、家族にするために語られたのです。今、私たちにも語られています。2016年。大阪教会に与えられた標語「愛する者たちよ。わたしたちは互いに愛し合おうではないか。愛は、神から出たものなのである。」(ヨハネ第一の手紙4章7節a)。これは、愛弟子ヨハネが語った言葉でした。ヨハネは主の十字架の愛によって、新しい将来へと突き動かされたのです。

目の前に注がれている主イエスの愛の流れは私たちの罪も醜さも、互いへの損得勘定も飛び越えて、私たちを愛の言葉、愛の行いへと押し出します。主イエスの愛の波に乗って、私たちは受け入れ合って生きて行くのです。過去の罪を越えて、新しい家族とされて行くのです。これが主イエスの目に映る私たちの姿です。

(記 説教要約奉仕者)